

目で見る
矢吹町史

編集 矢吹町
発行

「目で見る矢吹町史」の再版にあたって

矢吹町長 白坂武男

今、NHK大河ドラマ「独眼竜政宗」が放映されて大変な政宗ブームですが、「伊達治家記録」には、寛永十三年卯月二十三日政宗が病軀をおして最後の上洛を敢行した中途、矢吹ヶ原に鷹狩りをした記録があります。

また、来年は芭蕉が「奥の細道」の旅からおよそ三〇〇年になります。芭蕉もまた矢吹に一宿をとり、宿帳にその名を書き留めたことが「常良随行日記」からも伺われます。

こうしたことから、ふるさと歴史や文化遺産から多くのものを学び、さらに引き継いで創造的に発展させていくということは、私たちに課せられた責務であると思います。

昭和四十八年からはじめました「矢吹町史」編さん事業が、福島大学教授の小林先生をはじめ町内外の執筆、協力者等のご尽力によつて「目で見る矢吹町史」、「矢吹町史」資料編三巻、通史一巻、「資料所在収集目録」四冊が八年余を経て完結されました。関係者のご労苦に対し、改めて深く感謝を申し上げます。

この度の再版は、特に「図説」、「写真」、「年表」によつて、わかりやすく親しみやすい「目で見る矢吹町史」といたしましたので、町民皆様の歴史学習と、ふるさと文化の掘りおこしを通し、生き生きとした町づくりに役立てば喜ばしい限りであります。

再版では、昭和五十年以降の現況を追補するなどご理解いただける資料として作成しましたので、今後の町政伸展のためお心をお寄せいただければ幸いです。

再版にあたり、ご協力をいただきました関係各位に深く感謝いたしまして、ごあいさついたします。



「目で見る矢吹町史」の再版によせて

矢吹町教育委員会教育長 円谷 行雄

昭和五十年三月「目で見る矢吹町史」が多数の関係者のご努力により初版刊行の運びに至りましたことはご同慶に堪えない所であります。

しかし、その後十余年が経過し、再版要望が寄せられる現状にかんがみ、今回関係者と協議し補遺・訂正の必要とあわせ改訂版を刊行することになりました。

本書はもとの「矢吹町史四巻」を根拠にしております。しかし同書は、内容に含まれている資料等が膨大かつ、専門的な点もあるのでその中から重要な部分を系統的に図版を主として分かりやすく「目で見る矢吹町史一卷」にまとめて編集しなおしたものであります。

古人は歴史を鏡としてみています。大鏡、増鏡、吾妻鏡等のように歴史を時代の姿をうつす鏡としてみ、自らを反省し向上改善の根拠と考えたものであります。

思えば、矢吹の遠い原始・古代の昔から今に至るまで祖先の生活とにじみ出る努力の跡に想いを馳せるとき、感動と尊敬の念を禁じ得ないものがあります。その意味でも、われわれは、貴重な文化遺産を大事に取り扱い次代に引継いでいく責任があります。

多くの人がとが、郷土の歴史を正しく理解しそれに根ざした郷土愛の精神によってこそ、「さわやかな田園のまち矢吹」の発展が期待されるものと思います。

町史編さん事業は、全国的に急激な地域開発に即応して必要な措置として勃興してきたものであります。

即ち、地域開発に伴い貴重な埋蔵文化財等について急速にその保護・保全等の施策を講ずる必要に迫られて参りました。わが矢吹町でも、このような状況のもとで町史編さん事業への気運が高まり本事業に取り組んだのであります。



「事の成るは成る日に成るに非るなり」ということばがありますが、長い時間をかけて、本格的な発見、調査活動が専門職と必要な組織を設置し、数多くの人員と五年間の年月をかけ一応は終了いたしました。

今後もし新事業等の発見、調査に努めると共に各位の協力に期待する所であり
ます。

本書が過去の歴史と祖先の偉業を偲ぶよすがともなり、これを永く後世に伝え、昔の一宿場町矢吹が今後ますます発展し、住みよい街となるための資料としてご活用くださることを念願してやみません。

「目で見る矢吹町史」の再版にあたって

矢吹町議会議長 円谷正秋

福島空港の建設が決定され、県南地方の市町村にも新しい時代の夜明けが告げられました。また地方の産業・経済・文化を休むことなく運んで、地域の発展に貢献して来た国鉄矢吹駅も民営化され、駅開設百年を迎えた記念すべき年に「目で見る町史」の再版が刊行されますことは、誠に意義深いものがあります。今日の緑豊かな田園の町矢吹も、我々の祖先がそれぞれの時代を背景に、困苦欠乏に耐え、迂余曲折、創意工夫等々、たゆまぬ努力の中から築かれて来たものであります。

私たちは、今日の生活を知るためには、先人の足跡をたどり、そして歴史的段階を解明することによって幾千年の歳月の経過を知ることとあります。この度の再版は、矢吹町の歴史をより実証的に、正確に町民に提供してくれるでしょう。



この編集の任にあたられた方々のご苦勞と数多い資料を提供されました各位に心から敬意を表します。またこの一冊に凝縮された貴重な遺産を後世に伝え、矢吹町の歴史として今後の町づくりの糧となるものと信ずるものであります。

もくじ

弥生時代の生活……………七

古 代……………元

一、豪族の誕生と古墳……………三
二、奈良・平安時代の遺跡……………元

中 世……………四

一、中世の矢吹……………三
二、矢吹の館跡……………五
三、矢吹の板碑……………六

鎌倉時代の板碑……………七
南北朝時代の板碑……………九
室町時代の板碑……………九

四、伝説のなかの矢吹……………七

近 世……………七

一、近世の矢吹……………七
二、会津藩時代の矢吹……………七
三、白河藩領時代……………九

矢吹の宿……………八
阿武隈川通船……………九

三、高田藩・幕府領時代……………九
釜子陣屋・浅川陣屋支配……………一五

塙陣屋支配……………一七
四、旗本領中畑陣屋支配……………一八

五、矢吹の村々……………二四
六、矢吹の社寺……………二四

七、近世の文芸……………二五

近 代……………二五

一、明治・大正の矢吹……………二五
戊辰のつめあと……………二五

白河口の攻防戦……………二五

「目で見える矢吹町史」の再版にあたって

矢吹町長 白坂武男

「目で見える矢吹町史」の再版によせて

矢吹町教育長 岡谷行雄

「目で見える矢吹町史」の再版にあたって

矢吹町議会議長 岡谷正秋

町民憲章

町民の歌

矢吹の歌

口 絵

（初版）発行にあたって 仲西藤次（当時）

（初版）「矢吹町史」の発行によせて

矢吹町教育長 小林重孝（当時）

（初版）「目で見える町史」発行に際して

矢吹町議会議長 井戸沼俊頼（当時）

土地のおいたち……………一

土地の形成……………二

地形・地質……………三

原 始……………七

一、旧石器時代……………八

旧石器時代の生活……………九

二、縄文時代……………二

弓矢の出現……………二

前期……………三

中期……………四

後・晩期……………五
三、弥生時代……………六

御一新……………	二七
白河県と矢吹の村々……………	二八
文明開化……………	二九
馬車と汽車……………	三〇
勸業のあゆみ……………	三一
用水と農民の努力……………	三二
産業の成長……………	三三
岩瀬御狐場……………	三四
国営矢吹御狐場……………	三五
政治の動き……………	三六
矢吹の町村沿革と町村長……………	三七
明治・大正の官公所……………	三八
戦争と民衆……………	三九
学校のうつりかわり……………	四〇
大正デモクラシー……………	四一
明治・大正の文芸……………	四二
明治・大正のスポーツ……………	四三
昭和ははじめの矢吹……………	四四
農村の恐慌……………	四五
行政の推移……………	四六
矢吹が原開拓……………	四七
戦時体制下の矢吹……………	四八
戦中の生活……………	四九
昭和(戦前)の文芸……………	五〇
昭和(戦前)のスポーツ……………	五一
昭和(戦後)の矢吹……………	五二
戦後の混乱……………	五三
戦後の復興……………	五四
羽鳥用水と矢吹が原……………	五五
戦後の矢吹が原開拓……………	五六
農業協同組合の設立……………	五七
四、ゆたかな町づくりへの出発……………	五八
町村合併へのうき……………	五九

別 自

合併後のうき……………	二七
農業の変容……………	二八
高度経済成長下の矢吹……………	二九
五、さわやかな田園都市づくりへの出発……………	三〇
戦後矢吹の世相……………	三一
社会教育……………	三二
昭和(戦後)の文芸……………	三三
昭和(戦後)のスポーツ……………	三四
然……………	三五
気候……………	三六
動物・植物……………	三七
編……………	三八
庶民のくらしと変化……………	三九
民具……………	四〇
笠……………	四一
はきもの……………	四二
耕作図屏風……………	四三
農具……………	四四
養蚕……………	四五
交易用具……………	四六
酒……………	四七
手仕事……………	四八
業……………	四九
暦……………	五〇
絵紙……………	五一
交通……………	五二
民俗芸能……………	五三
石仏……………	五四
馬の信仰……………	五五
民間信仰……………	五六

追補 さわやかな田園都市づくり

(二十一世紀をめざして)

幼稚園	二六二
小学校・中学校	二六三
高等学校・県農業経営大学校・保育園	二六四
集会・福祉施設	二六五
人口構成	二六九
病院・郵便局・警察署	二七〇
公園の建設と整備	二七一
出版・文化・生活	二七三
町文化財	二七九
台風10号による集中豪雨	二八三
さわやか田園都市をめざして	二八四
町内製造事業所一覧	二八五
現職町議会議員一覧	二八六
歴代町長・助役・収入役	二八七
歴代教育長・町議会議員	二八八
矢吹町内新旧字名対照一覧	二八八

「目で見える矢吹町史」関係者
(初版) (改訂版)

考古・歴史年表

矢吹町民憲章（昭和58年11月3日制定）

前文

わたくしたちは、自治をになう町民としての自覚にたち、先人の
ひらいた郷土を愛し、活力に満ちたさわやかな田園都市づくりを
とめて、この町民憲章を定めます。

本文

- 1、勤労にいそしみ、創意をいかし、力あふれる豊かなまちをつくります。
- 1、手をつなぎ、心ふれあう安らぎのあるまちをつくります。
- 1、健全な人づくりをめざし、希望にみちた明るいまちをつくります。
- 1、自然を愛し、調和のとれたさわやかなまちをつくります。
- 1、歴史を大切に、ふくよかな文化の香り高いまちをつくります。

町章

矢吹の「矢」を図案化した
もので、原図は仲西保蔵氏
の考案による。

（昭和43年5月1日制定）



町民憲章碑建立(昭和58年11月3日)庁舎前

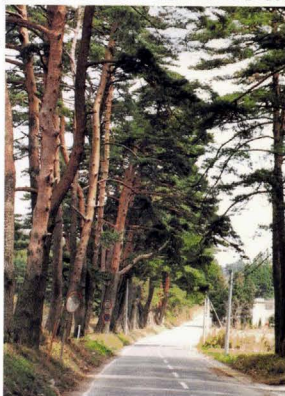


町の木

あかまつ(マツ科)→

町の花(昭和49年7月26日制定)

↓しゅんらん(ラン科)



町民の歌

昭和50年11月3日

伊藤 一 清 作詞

高橋 英子 作曲

♩=100くらい あかるく たのしく



町民の歌

作詞 伊藤 一清
作曲 高橋 英子

一、那須の山なみ 雲流れ
矢吹ヶ原の 朝ぼらけ
羽鳥の水の せせらぎに
自然の恵み 限りなし
田園の町 あ、矢吹

二、ゆかりは遠く 縄文の
先人住みし 花の里
千古の息吹き 新しく
いまちのくに こだます
ふるさとの町 あ、矢吹

三、道は拓けん 大池の
水面に映ゆる 赤松よ
ここに集いし よき人の
熱き血潮に 力あり
若い力の あ、矢吹



中畑小唄

作詞 星 一 朔
作曲 星 一 朔

- 一、ハア泉里辺のあねさんかぶり
とけし前髪の水鏡に花が咲く
土手にれんげの花が咲く
- 二、ハア夕日うするる菜の花庭
そよ吹きや黄金の波をうつ
臘月夜に蝶が飛ぶ
- 三、あやめ花咲く五月も晴れて
若い花嫁田植する
広い耕土は青い
- 四、ハア那須の山から粉雪とべば
寒い北風とらを吹く
家ははつちの地作る
- 五、ハア村はよい村人情も厚い
やがて明かぬ西の横範村
村の役場は西洋館村
キラシオアイデヨ中畑へ

三神音頭

作詞 佐藤 初 二 郎
作曲 山口 哲 夫
振付 岩谷 ツ ネ

- 一、さあさ米なんしよ三神の郷へよ
音に聞えた昔ながらの米どころ
中丸八山 朝霧 こめてよ
- 二、馬の背中をおくにお慢の駄が行く
三神耕土の田並をこらんよ
- 三、郡で模範じゃ村の自慢だ 産神だ
奥州白河十万石のよ
- 四、お扶持持けた
おらが祖先の血を生かせ
- 五、阿武隈川原の一本野菊よ
誰を待つやら月にぬれてる初姿

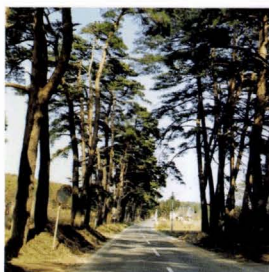
中畑畑は地つつき

作詞 菱沼 達 也
作曲 ことう ゆ だ か

- 一、丘の向うに
のびる中畑
みんなの村よ
ソウダく
ひのひかり
稲穂がのびる ヨイシ
- 二、村の中には
のびる中畑
みんなの村よ
ソウダく
ひのひかり
希望がのびる ヨイシ
- 三、若い者には
のびる中畑
みんなの村よ
ソウダく
ひのひかり
希望がのびる ヨイシ



昭和27年10月1日
作詞 野木 杏 青
作曲 古関 裕 而



矢吹音頭

編集指揮 小畑 浩 之
演 奏 三鷹市管弦楽団
う た 矢吹音頭保存会

- 一、花の吹雪に 矢柄を葺いたネ
ソレ サノセ
- 二、羽鳥ダムから 来る水いとしネ
ソレ サノセ
早苗とる娘の 裾ぬらす
ダムはダムは日本一 ヤレコノセ
- 三、昔のまんだら 観音さまもネ
ソレ サノセ
咲いたききょうも 岩の上
数は数は三十三 ヤレコノセ
- 四、あゆり沼なら 三日月さまもネ
ソレ サノセ
お花畑どころの 水鏡
鳴くは鳴くは鈴音の虫 ヤレコノセ
- 五、むかし松原 萱山のしくれネ
ソレ サノセ
今は実りの 矢吹原
ここはここは輝やく町 ヤレコノセ

目で見る 矢吹町史



■ 監修 福島大学教授 小林 清 治
文化センター 宗 像喜代次
■ 編集／発行 矢 吹 町



陣ヶ岡出土旧石器(三城目)

柏山出土縄文土器(中畑)



福島県指定史跡
鬼穴古墳
(神田)



下荒具B遺跡(部分)



カニ沢瓦窯出土布目瓦(中畑)
ヘラ書で「寺」とある。



下荒具B遺跡(中畑)



矢吹町指定史跡 国 神 館 跡 (中畑)



川原阿弥陀来迎三尊浮彫供養塔
(三城目).

薬師如来木仏座像 (境町 長徳寺)



三城目村絵図（部分）



阿武隈通船絵図（部分）





中畑村絵図(部分)

旧中畑陣屋役宅



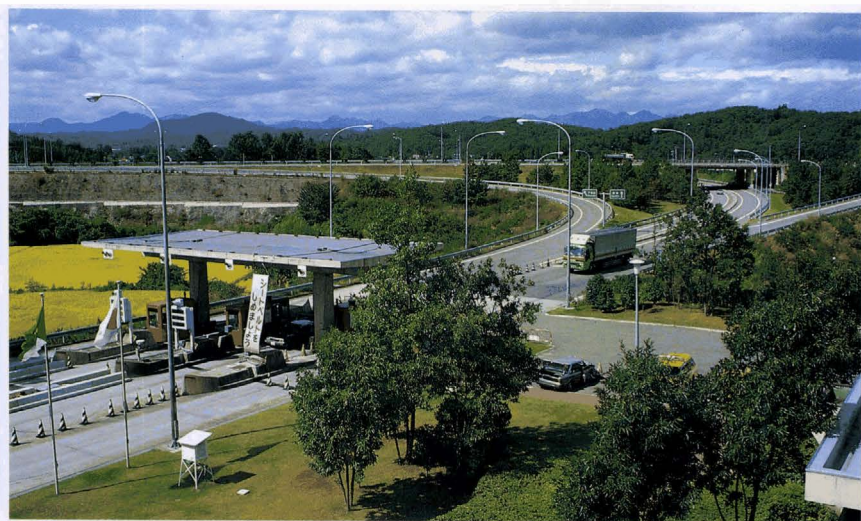
旧中畑陣屋役宅(玄関)







空からの矢吹インターチェンジ附近



東北自動車道 矢吹インター料金所

発刊にあたって

矢吹町長 仲西藤次

町を訪れる人から矢吹の由来について尋ねられるが、子供心に聞かされていることは「昔、八幡太郎義家が奥州入りの時、弓の矢柄で八幡神社の祠の屋根を葺いた」つまり矢葺が矢吹になったという程度の答えをしていたにすぎなかった。

昭和四十八年、東北の夜明けを告げる東北縦貫道路が一部開通し、わが町にもインターチェンジができることになった。町ではこの機会に将来の発展策として、「さわやかな田園都市」造りを目標に「矢吹町振興計画書」を策定したが、その際論議されたことは、わが町は、どのような経過を辿って発展してきたかを解明する必要があるということであった。

同時に昭和四十八年という年は、わが町に社会学勉強の場として中央公民館が完成し、郷土史研究の気運が盛り上がってきた。また、これは別に昭和四十五年度から、中畑地区における泉州改修工事に伴う約四〇〇ヘクタールの農地基盤整備事業の途上、幾多の貴重な考古資料が発掘されたが、これらの発掘により考古学研究家の中からも、郷土の歴史を解明しようとする気運が盛り上がってきた。

以上のようなことが重なって、町史編纂の発想となり、町政施行七十五年、一町二カ村（旧矢吹町、中畑村、三神村、旧広戸村柿之内地区）合併二十年を記念し、編纂を行なうことになった。計画としては初年度『目で見る矢吹町史』一卷、二年度以降に資料編並びに通史編を発刊する予定である。

編輯にあたっては、監修者として福大教授小林清治先生、県文化センターの宗像喜代次先生外別項の編纂協力者名簿の通り、町内外七〇〇名以上の御協賛を頂き深く感謝申し上げると共に、次巻の資料編の発刊を計画しているので、引き続き資料の提供等に御援助を重ねてお願い申し上げます。

ちなみに、昭和四十九年という年はアラブ諸国の原油削減になり、高度成長を続けて来た日本を始め、世界の先進国といわれる国々が経済的に一大混乱をきたした年であるが、町では、町始まって以来の中層五階建の公営住宅が建てられ、三階建の役場庁舎も着工された年である。

終りに、本書の刊行が、いささかなりとも明日の矢吹町発展の糧となれば幸と存じます。



『矢吹町史』の発刊によせて

矢吹町教育長 小林 重孝

待望久しかった町史の編纂事業が昭和四十八年一月、編纂委員会の発足と共に開始し、あれから約二年、来春にはその第一巻とも見られる『目で見る矢吹町史』の発刊の運びとなったことは、まことに喜ばしい限りであります。温故知新とは、よく言われることですが、わが矢吹町は歴史的に見て決して、はなばなしい目立ったものとしては何もなく、いわばごく平凡な庶民の町でありますので、事務局としては最初から資料の発掘・調査に明け暮れた次第でありました。

しかし丁度、東北高速道の工事や、泉川河川改修に伴なう中畑地区の圃場整備によって、古墳や古代の住居跡、中世の館跡等の発掘調査が比較的好都合でもありました。また監修に当られた先生方は斯界の権威者であり、執筆された専門委員の方々や大事な資料の提供に御協力下さった地域の方々には大変御世話になりました。そのおかげで、長い間眠っていた矢吹の姿が浮彫りとなって現われるに至ったことは、まことに意義深いことと言わなければなりません。

思えば遠い原始・古代を経て今日に至るまで、わが祖先の努力とその忍耐の連続には只々感謝と尊敬の念を新たにします。その意味でも、貴重な文化遺産を大事に保存し、発展させて次代に引き継ぐ責任があるわけがあります。

歴史は、科学的でなければなりません。その点、わが矢吹町史が立派に日本史の中に位置づけられ、今後発展して行く町の展望にその推理判断の資となることを確信するものであります。

どうかより一層皆さんの愛町心を期待いたします。そして今後継続して発刊される資料・通史編の編纂事業に何卒御協力下さいますよう心からお願いいたします。



『目で見る町史』発刊に際して

矢吹町議会議長

井戸沼 俊 顕

人間の成長にも歴史があります。生まれたときから死んでゆくまでの段階はそれ／＼法的に発展してゆきます。一人の人間でさえそうなのだから、社会の発展についてはなおさらのことです。

原始・古代・中世・近世・現代と区別される。また、別なことは言えば、奴隸社会・封建社会・資本主義社会というように、一つの歴史的段階から次の段階に発展します。私たちの祖先は、それ／＼の時代的背景の中で多くの苦難と戦ってきました。幾千年の歳月を経て、今日の生活・文化の基礎が築かれてきたのです。

私たちは、今の生活を知るためにはどうしても祖先の足跡を実証的に知ることが必要であります。それは、今の生活がこれからどのように発展してゆくのかを知るためには、さけて通ることのできない問題であるからであります。

今度発刊される『目で見る町史』は、余すところなく実証的に私たち町民に「歴史」を提供し「歴史」を考えさせる唯一の参考書になることでしよう。町史編纂委員会があらゆる困難を克服し、町民の足の入れることのできない、未踏の分野を解明してくれたその努力に心から敬意を表します。

最後に、一つの事業というのは、たいへんな年月を費すものだと、つくづく感じます。昭和二十七年地域に文化財保護条例が生まれて、町史編纂の第一号が生まれるまで約二十余年、それまで数々の調査資料保存に努力してきた先輩関係者のみなさまに、心から「御苦勞さま」と申し上げたいのであります。



